

## 志を赤い夕陽に込めて

葦高文化講演会より

志太 勤（高5）

千人余の拍手に引っ張り出されるように彼は立ち上がり、ゆっくりと中央の演壇に歩を進めた。聴衆の顔を見渡す仕種は堂に入ったものだったが、黒い塊の中に光る若々しい二千個の瞳に見詰められて少したじろいだのか、彼は、はにかんだような低い声で語り出した。葦高講堂で開催された十一月十三日の文化講演会の始まりであった。

手打ちを食らったことか……。何時の間にかグロブは戻っていました。その時以来、私は自分で確かめることなしには人を疑うことはしないように努めています。

彼は、がき大将で野球小僧だった頃がそこに見えるかのように、講堂の天井を見上げた。そして、一息入れた後、意を決したかのようになり、彼の辛い青春のエピソードを語り出した。

終戦の翌年、私が小学校六年生の時、「グロブ事件」が起こりました。敵方スポーツが解禁されて間もない頃で、私は偶然押し入れの隅から父が隠し持っていた革製のグロブを見つけ出し、得意になって友人達と野球の真似事をして遊んでいた頃のことです。

ある日その大事なグロブが私の机から消えてしまいました。あの友人が、犯人は疎開してきていた別の友人の仕業に違いないというので、私はその友人をきつく問い詰めていました。数日後の朝、担任の先生が「志太！前に出てこい！」と恐れ顔をして私を呼びました。このこと出ていった私の顔に大きな平手打ちが飛んできました。「お前は確かめもせずに人を

疑うのか！」バシッ。先生の剣幕と平手打ちの強さに圧倒され、私はズルズルと教室の後の壁まで追い詰められました。その間、何発も真暗になりました。前が真暗になりました。「もう野球をやっちゃいかん。このままで手が動かなくなる」と医者は冷た



く宣言しました。野球しか頭になかった私にとって、その言葉は大変な重圧でした。

手を吊り上げられて悶々としていたある日、私はこっそりと病院を抜け出し熱海の錦ヶ浦に向かいました。崖の上の松に体を預けて下を見ると、岩場に囲まれた青い海の白い渦と波しぶきが嘲笑うかのようでもあり、誘っているようでもありました。私はただただ涙があふれてきてじっと固まっていた。

「あんたどうしたんだい」という声に我に返って振向くと、錦ヶ浦の監視員さんが後に立っていました。私は監視員さんの手にすがり、上の道まで戻りました。「何があつたのか知らないが、あんたはまだ若い。魚の餌になるよりも、もっとほかのことができるだろ」と監視員さんはやさしく見送ってくれました。

野球ができなくなって空虚な気持ちのままに過ごす日々が続きました。そして気が付けば卒業間近でした。大学へ進学するほど勉強は

していなかったもので、担任の先生の勧めもあり、実業界でやってみようかと決心しました。

人生には様々な転機があり、その時によき協力者、よき助言者が必ず出現するという。そして、自分の気持が純粋であるほど大きなひらめきが浮かんでくるものらしい。多くの成功者に共通する話は何にもあった。

若いということもあって自分では精一杯やっているつもりでもなかなか仕事はうまく軌道には乗りませんでした。それでも真面目にやっていたら認められる人がいるものですよ。給食サービスをしていたある年の暮れ、仕事でお世話になつていた藤田さんという人が

「君はいつも確実な仕事をしてくれてるから、来月分の支払の一部を先に渡しておくよ」と言ってくれました。ラーメン一杯が四十円の時代です。年が越せるかどうかの私にとってそれは非常にあり難いことでした。その帰り道の新宿の雑踏は、鎮守の森のお祭りのように感じられました。新宿は毎日がお祭りだ、人が集まり、いろいろなお食べ物が売られている、そう思えたのです。それが私の新しい事業のヒントになったのです。

何か晴れ晴れとした気持ちで乗った電車の窓から、真っ赤な太陽が目に飛び込んで来ました。胸の奥から「空を仰げば……」の曲が流れてきました。この時私は大きな勇気を与えられ、フードサービス事業をもっともっと大きくするぞと決意しました。シダックスのカンパニーカラーは赤ですが、この時の太陽の色を、決意を忘れないようにと定めたわけです。

志の強さ、それを具体化する計画、そして計画に沿って歩を進める力が、物事の達成には必要だと次第に彼の言葉に力が入る。

私の会社の近くに深大寺という由緒あるお寺があります。調布市に本拠を持ってから三十年以上毎年お参りをしております。今年は今現在千四百億円の売上を四年後には三千億円でできますようにと願を掛けました。皆さんご承知のように願を掛ければ物事が成るわけではありません。私はいろいろな機会がある毎に申し上げているのですが、皆様方それぞれの人生において、志、計画、達成力の三つが非常に大事だと思います。

「行き先が決まらずに到達ができるか」という言葉があるように目指すところすなわち志を決めな限りに進むことはできず、いたずらに時間を費やすばかりです。機会があつてアメリカのフードサービス会社のオーナーであるブラウンさんという人にお話を伺ったことがありますが、「ミスター志太、私は全米一のフードサービス会社

を目指す。君は日本一を先ず目指しなさい」と言われました。また私の会社は日本で四、五十番目くらいの時でしたが、米国からの帰りの飛行機の中でその言葉を何度も頭の中で繰り返しました。その彼はシカゴ市長を務め、会社も一時ではありますがアメリカにもなりました。私の会社もそこそこの会社になって参りました。



志を決めたならば計画です。目標へたどり着くまでの道のりをどのようにたどっていくかを描くことが大切になります。自分の進んでいる道をチェックする物差しを作るのです。会社経営でしたら売上高とか利益率とかの数値目標をいくつかアとしていくかであり、皆さんのような学生なら、志望校に入学するためにどの科目をいつまでにどの程度マスターするかを決める必要があります。

そして実際にチャレンジしてい

きます。実績と計画とは常に比較し、ギャップがあればその時々に必要な手を加えて修正していきま

熱弁をふるう志太 勤さん

事業所向けのお弁当は、かつてはメニューは一日に一つでした。しかし、それでは、お惣菜によつては食べられないものもあります。私たちがいち早くお

ので社名にも工業を入れて、中途半端なやりかたではだめだと思い、サービスに徹することにしました。

話突然変わるのですが、近代日本には三つの転換期があるといわれています。一つは明治維新、そして第二次大戦、そして今日のグローバルスタンダードの時代といわれます。いずれも、ものごとの価値観ががらりと変わり、今までの尺度では対応しきれない時代への大変革期です。四億年前に宇宙の隕石が地球に衝突した時のように非常に大きなインパクトだと表現した方もおります。

熱心に聞き入る生徒達に、彼は希望と勇気をもって独創的な人生を送ることを勧める。葎高の校風にはそのよう要素が伝統的に流れているらしい。青年たちに向け

漫然と学校を卒業し、組織の下で生きていかれるような時代ではなくなっています。自分は何に強くなつたらいいかをしっかりと決めて、知識と技術を蓄積していく必要があります。

現代の事業経営はCEO（最高意思決定者）、CIO（最高情報責任者）、CFO（最高財務責任者）、COO（最高業務責任者）などスペシャリストの集合体で運営されています。生半かなゼネラリストでは通用しません。

寒い会場の中にもかかわらず、上着を脱ぎタオルで顔をぬぐいながら熱弁を振るった彼は、女生徒からももらった花束を照れくさそうに抱えて拍手の中を抜けて会場を去った。後ろ姿を目で追いながら花束よりも応援団のエイルの方が似合ったのにと感じた。